

風を待つ

劇作家・演出家・俳優

藤井颯太郎

1995年生まれ。兵庫県立宇坂北高校。演劇科在学中。幻灯劇場。18歳の時に書いた戯曲「ミルノメコリオ」でせんだい短期演劇賞を最年少受賞。近年は、架空のホテルに宿泊しながら観劇する『泊まれる演劇』シリーズの演出を手掛けた。NHK連続テレビ小説「おちよん」に出演したり、ABCテレビ「THE GREATEST SHOWMAN」でA・E・R・O・P・I・C・O・ラボ！音楽劇を案ずるなど、多方面で頑張っている。

七年付き合った恋人にフラれた。通い慣れた最寄りのファミレスで、二人揃ってナポリタンを食べようとしていた時だった。「好きな人ができた」ただけ打ち明け彼は、わたしの反応を待続けた。小さな鉄板の上でケチャップが焦げる音が鳴っている。彼はこういう時、言わなければならない言葉を口にしない。次の言葉を待ち続けていると彼は耐えられなくなったのか、我慢できなくなったのか、ささくなくナポリタンを食べ始めた。わたしたちらしい、まぬけな別れ話だった。

わたしの部屋にあった彼の私物を、二人で段ボールに詰めて彼の家へ郵送した。彼が欲しがったのでプレゼントしたケトルは「これ便利だからあげるよ」とわたしの元へ戻ってきた。玄関へ向かう彼をわたしは見送ることもできず、ベッドの上から手を振った。ドアが閉まるとわたしはベッドに倒れ込み、小一時間、自分が嗚咽する声を聞いた。半ば過呼吸のようになりながら泣くうち、ひゅうひゅうと隙間風のような音が、自分の胸のあたりから聞こえてくるようになった。わたしに大きな穴が空いてしまったんだ、と思った。わたしの全てだった。

次の日から数週間、わたしはとにかく頑張った。頑張って出社し、頑張って仕事に打ち込み、本来誰かがやるはずだった仕事ですら頑張って引き受けた。頑張ることで胸にあいた風穴を埋めようとした。それでも、どうしても元の生活には戻れなかった。思い出さずにすむよう部屋の模様替えをしてる最中、ベッドの下から一冊の漫画が出てきた。アイツが好きな漫画の六巻。もうダメだった。そのままベッドに倒れ込んで、指先一本動かすことが出来なくなった。ベッドの上で何日が経ったんだろう。最初のうちは煩わしかった職場からの電話も数日するとパタリと止んだ。携帯の充電が無くなっただけかもしれない。最寄りのファミレス——。帰ってきたケトル——。ずっと探していた六巻——。この七年の思い出が、オセロで大負けした時のように一つ一つ裏返っていつて、幸せな時間など本当は一つも無かったような気がしてきた。

風から手紙をもたらったのは、ちょうどそんな時期だった。郵便受けのチラシの中になにげなく紛れ込んでいた手紙には「久しぶりに会って話したい」という内容とともに集合場所と日時が書かれていた。差出人には「西野風」と書かれている。名前を見ても誰だか思い出せない。と、手紙に記された文字を見るうち、うつすらと記憶が蘇ってきた。そうだ。風とわたしは幼稚園の頃、最も仲の良い友達だったのだ。といっても、もう何十年も会っていないし、正直わたしは彼女のことを全く覚えていない。会っても話せることはなにも無いだろう。断りたいが連絡手段は手紙しかなく、指定された待ち合わせの日は明日だった。今から「行けない」という手紙を出したところで、彼女の手元には届かない。

結局わたしは風に会いに行くことにした。集合場所は実家近くの公園。平日昼間の公園はすいていて、遠いベンチに携帯を触っている男の子が一人いるだけだった。少し緊張しながら待つ。だが、集合時間になっても誰一人現れない。念の為に二十分ほど待ってやっと、私は約束をすっぽかされたのだと気付いた。久しぶりに笑った。なぜこんなイタズラに引っかけたんだろう。深く公園を後にしようとする、突然ベンチに腰掛けていた男の子が立ち上がり、声をかけてきた。「もしかして、風さんを持ってるんじゃないですか?」彼はワイヤレスイヤホンで耳から外しながらそう言った。「僕も風さんを持ってるんです」彼も手に、手紙を持っていた。

彼は「紙木」と名乗った。公園横の喫茶店へ入ると、紙木くんは風との関係を話してくれた。「僕は風さんの後輩で。中学ん時の先輩なんでもう十年以上前なんですけど」窓から見える夕方の公園では下校中の子供達がランドセルをはっぱり出して走り回っている。「どういう関係ですか。風さんと」彼に聞かれて初めて、わたしは風とわたしの関係はなんだったんだろうと考え込んだ。長く考え込むうちに、ふと、懐かしい記憶が浮かび上がってきた。「子供の時、砂場でお城とか作るじゃないですか。お城を作って、それを崩さないように地下にトンネルを掘るんです。片方の入口からだけ掘り進めすぎるとバランスが悪くなって崩れるんで、両方の入り口から息を合わせて掘らなきゃいけないんです」わたしはいつも風とだけトンネルを掘っていた。わたしたちはいつも砂の城を崩すことなくトンネルを開通させた。そしてトンネルの奥深くで、指先だけ手を繋いで、わたしたちはケタケタと笑った。「まあ、そういう友達ですわわたしたちは」

そのまま、わたしたちは三時間ほど風を待った。わたしたちが話せる話題は風のこと以外に何もなかったもので、ずっと風の話をした。昨日まで名前を忘れていた彼女のことを話すうち、忘れてしまっていたことが不思議なくらい、わたしにとって風がどれだけ大切な存在だったかを思い出していくことができた。

「実は僕、この手紙が来るまで風さんのこと忘れてたんです」わたしの心を読んだかのように、紙木くんがつぶやいた。「でもそれは僕らが動物だからだと思うんです」とグラスに残った水をストローで回し始めた。「動物は生き延びるために、嫌なことを覚え続けるように出来るんですよ。二度と同じ目に合わないように、嬉しいことより不幸の方が脳に刻まれやすいんです。だから案外覚えてないだけで、これまで忘れてしまったものの大部分は、実は結構しあわせな時間だったりするのかもしれない。さっき公園で風さんを持ってる間、そんなことを考えてました」紙木くんの話はあまりに楽観的でにわかに信じがたかったが、私は風の柔らかな指先を思い出しながら、小さく何度か頷いた。

日も暮れ、わたしたちは帰ることにした。これ以上、風を待っても意味がない気がしてきたのだ。なぜわたしたちを同時に呼び出し、同じ場所で待ち合わせしようとしたのか、なぜこの場に姿を現さないことにしたのか、わたしたちにはどうにも考えの及ばないことはかりだった。ただ、紙木くんもわたしも風の話ができて満足したのだ。

家へ戻ると、部屋の中が以前とは少しだけ、違って見えるようになっていた。端的にいうと、ただの散らかった小汚い部屋になっていた。ケトルで湯を沸かす間、荒れた部屋を片付ける。例の漫画を拾い上げ、読んでみる。前の巻で何が起きたのか全く思い出すことはできなかったが、それでもアイツが気に入っていた漫画は、結構面白かった。

